

# 手書きテキストの翻字

今野 真二

---

## Abstract:

### Transliteration of handwritten text

This paper discusses what should be considered when transliterating texts written before the Showa period, i.e. the Taisho period, the Meiji period, the Edo period, and earlier. “Transliteration” is defined as converting a text written in the orthography at the time of the text’s creation into one using modern orthography.

Currently, images of various texts put into writing in the past have been released, and digitized “transliterated texts” have been made available. Images and a “transliterated text” are often published as a set. It is meaningful to explore “transliteration” on the premise that the published images can be used as reference. In addition, it is necessary to consider current “transliteration” practice with a view to digitization, ensuring that information can be consistently conveyed electronically. In order to explore such “transliteration” standards, that is, “standard transliteration”, I will present a transliterated text of Akutagawa Ryunosuke’s own handwritten manuscript of “*Mother*” possessed by the CV Star East Asian Library at the University of California, Berkeley.

## Key words

Standard transliteration, Kanji font processing, text resiliency, electronic information exchange

## 要 旨：

本稿では、昭和期よりも前、大正期、明治期、江戸期、それ以前の時期に文字化されたテキストを「翻字」するにあたって、どのようなことを考慮すればよいかを論じることを第一の目的とした。「翻字」は当該テキスト成立時期の文字体系にしたがって文字化されたテキストを、現在の文字体系にそって文字化することと定義する。

現在は、過去において文字化されたさまざまなテキストの画像が公開され、電子化された「翻字」が公開されている。画像と「翻字」とがセットとなって公開されていることも少なくない。公開されている画像を確認できることを前提とした「翻

字」が模索されることは意義がある。また、現在の「翻字」は電子化を視野に入れ、電子的に安定して情報交換ができることを考えておく必要がある。そうした「翻字」のスタンダード、すなわち「標準的翻字」を模索するために、具体的にはカリフォルニア大学バークレー校のC・V・スター東アジア図書館に蔵されている、芥川龍之介の作品である「母」の自筆原稿の「翻字」を示した。

## キーワード：

標準的翻字、漢字字体処理、テキストの復元性、電子的な情報交換

## はじめに

本稿では、昭和期よりも前（註1）、すなわち、大正期、明治期、江戸期、それ以前に文字化された「テキスト」を「翻字」する（註2）ということを論じることを目的とする。

昭和期以前に文字化されたテキストを「情報」として電子的に公開する方法は少なくとも二つある。一つは、それを画像データとして公開することで、かつては閲覧することが難しかったテキストが画像としてWEB上に公開され、世界中どこにいてもそれを見ることができるよう環境が整いつつある。もちろんテキストを実見するのと、画像によってみるのとはさまざまな「違い」があることはいうまでもないが、とにもかくにも、ある程度の確認は可能であるし、画像に依拠した「研究」もひろく行なわれるようになっていく（註3）。

もう一つは翻字をして、電子的に扱えるようなかたちのテキストに整えるということである。この場合は「電子的に扱えるようなかたちのテキスト」ということが重要で、そこにはさまざまな「課題」のようなものがある。

これからの十年、二十年、百年をみすえた場合、電子化するということは（それだけが重要ということではもちろんないが）必須であろう。電子化することでテキストは（おそらく、とっておくが）半永久的に保存されるであろう。しかし、それだけに、複製テキストが残って、原テキストが失われるのと同じように、電子化されたテキストだけが残り、原テキス

トが失われるということも（あつてはならないと思うが）想定しておく必要があり、安定的な電子化ということを検討する必要性もたかくなっていると考える。

稿者は「安定性」と同時に「復元性」を考えることを重視している。一定の「手順」あるいは「方法」によって「翻字」が行なわれていれば、その「手順」「方法」によって、翻字テキストから原テキストのありかたを（ある程度までにしても）「復元」できることになる。

「復元」ということについての「関心」は研究分野によってもさまざまであることが推測できる。例えば、近代文学研究分野においては、使用テキストは「全集」であることが多い。文庫本をテキストとした研究論文もある。稿者は日本語学分野において仕事をしているので、文庫本をテキストとして研究論文を書くということは考えにくい、それほど依拠テキストについての「関心」が異なる。

すべての「研究・考察」が自筆原稿によらなければならないということはもちろんない。しかし、大正期、明治期に文字化された原稿の画像を、あらゆる人が読めるということでもない。そうであるとすれば、原稿の画像は翻字と組み合わせて公開されていることが望ましい。画像と組み合わせられていれば、翻字はいつそうわかりやすいし、翻字と組み合わせられていることによって、画像の「情報」も読みとりやすくなる。翻字に簡単な解説が附されていればさらによい。

本稿では、University of California, Berkeley（カリフォルニア大学バークレー校）の the C. V. Starr East Asian Library（C・V・スター東アジア図書館）（以下EALと略することがある）に蔵されている、芥川龍之介の「母」の自筆原稿を、EALが公開しているデジタル画像を使って翻字した結果を示し、合わせて「手書きテキストの翻字」ということについての提言を行なうことにしたい。芥川龍之介の短編「母」は大正十（一九二一）年九月に刊行された『中央公論』第三十六年第十号に発表され、後に『春服』（大正十二年五月、春陽堂）に収められた。『春服』に収められるにあたって、大幅な加筆がなされていることがすでに指摘されている。「母」は『芥川龍之介全集』第八巻（一九九六年、岩波書店）に収められているが、その「本文」は『春服』所収のものを底本とし、初出以下と校合した」（第八巻「後

記」三八一頁)もので、自筆原稿についてはまったくふれられていない。

この芥川龍之介の「母」の自筆原稿は、第二次世界大戦後に、EALが購入した旧三井文庫コレクションに含まれていたものである。この自筆原稿については、すでに、澤西祐典「カリフォルニア大学バークレー校C・V・スター東アジア図書館所蔵・芥川龍之介「母」原稿について」(『別府大学国語国文学』第五十七号、二〇一五年十二月)が発表されており、同論文において「本文翻刻」が行なわれている。澤西祐典(二〇一五)は自筆原稿を実見しており、デジタル画像に基づく本稿とは、根本的に「条件」が異なるが、そうしたことを別にして、「判読」「判断」において異なる点が少なくない。稿者の翻字はあえていうならば、テキストの復元を視野に入れた「日本語学的翻字」とでもいうべきもので、それを実際に示してみたい。

## 一 翻字の凡例

本稿で採りあげる芥川龍之介「母」の自筆原稿には、芥川自身によると思われる修正の跡が残されている。原稿の左端には「中央公論 小説六」という紫色のスタンプがおされており、赤インクによる書き込みなどもある。赤インクによる書き込みは「本文ポイント／間アキ十七行」など、印刷のための指示と思われるものであるので、『中央公論』編集部による書き込みとみるのが自然であろう。こうした印刷のための書き込みは、翻字の対象とはせず、必要に応じて別に説明をするのがよいと考える。

澤西祐典(二〇一五)は龍之介による「訂正が数行にわたる箇所には、貼紙が施され、訂正本文が書込まれている。具体的には原稿の一〇枚目、一三枚目、二四枚目、二五枚目、二六枚目、二七枚目、三四枚目、三五枚目、四二枚目に貼り付け訂正がある」ことを指摘し、「訂正前の本文に関しても、判読可能な限り、翻刻した」と述べている。

デジタル画像では、「貼り付け訂正」がある、もしくはありそうなことはわかるが、文字を判読することは難しい。また、自筆原稿を実見している澤西祐典(二〇一五)も「判読可能な限り」と述べており、実見したとしても貼紙の状態、状況によっては、「訂正前」の文字が判読できるとは限らない。したがって、「貼り付け訂正」については、結局は貼り紙をはがさない限りは訂正前の文字を正確に判読することはできないことになる。そう考えると、「貼り付け訂正」については、「貼り紙の状況に応じて可能な範囲で判読」せざるをえない。本稿ではデジタル画像に基づいて判読を行なうので、「貼り付け訂正」については、翻字に含めないことにする。

次に具体的な「翻字」の「方針」について「凡例」のかたちで述べる。  
翻字する対象となるテキストの状態を便宜的に「原態」と呼ぶことにする。

一、「原態」をできるかぎりそのままのかたちで電子的に保存することを大原則とする。

二、できるかぎり安定した電子的な情報交換ができる、ということを原則とする。

三、一の原則に基づき、漢字字体は電子的に安定した情報交換が可能な範囲で、できる だけ使われている漢字字体を使う。

四、一の原則に基づき、仮名の使い方は「原態」を保存する。

五、平仮名、片仮名について、現在使われていない字体（いわゆる「変体仮名」と呼ばれている字体）が使われていた場合は、現在使われている字体に置き換える。

六、おもに平仮名一字分として使われている繰り返し符号「ゝ・ゞ」、片仮名一字分として使われている繰り返し符号「ゝ・ゞ」は電子的に表示できるので、それを使う。

漢字一字分として使われている繰り返し符号「々」も電子的に表示できるので、それを使う。文字二字以上に使われる平仮名の「く」を縦方向にのびたような形状の繰り返し符号は「く」によって電子的に表示できないはないが、平仮名「く」と の視覚的な区別がつけにくい。文字二字以上の繰り返しと思われる場合は便宜的に「々々」、それ以上と思われる場合は、想定される文字数に合わせて「々々々」などと表示する。

七、「原態」において施されている振仮名は、振仮名が施されている文字列の後ろに丸括弧に入れて示す。例えば「蕪湖<sup>ウウフウ</sup>」であれば「蕪湖（ウウフウ）」と「翻字」する。

八、改行は、表題、署名、「原態」で一字下げになっている箇所（段落の始まりなど）の改行のみを保存する。

九、ダッシュ・ダーシ（dash）記号は「原態」の長さにかかわらず二文字分とする。

十、抹消箇所は〔 〕に入れて示す。〔 〕は二次にわたる訂正、〔〔 〕〕は三次にわたる訂正を示す。何らかの文字を訂正して記された文字には傍線を施す。したがって、直前に〔 〕がなく傍線が施されている文字は抹消がないのだから、追加された文字ということになる。

十一、□は判読できなかった文字を示す。

十二、翻字者が何らかの過誤があると推測した箇所については、「＊」を示すことがある。「＊」が複数箇所ある場合は算用数字を附す。

本稿では「翻字」は過去に文字化されたテキストを「おもに現在使われている文字を使って文字化すること」と定義している。「翻字」は「過去

に文字化されたテキストの「原態」をできるかぎりそのままのかたちで電子的に保存する」ということを考えながら、現在の文字体系、現在の表記体系にちかづけて、現代日本語母語話者がよみやすいということを考えなければならない。「原態」そのままは画像によって確認できるということをも前提にすれば、どこまでをどのように電子的に保存すればよいかということをも十分に考慮しておく必要がある。これまでの「翻字」は少なくとも電子化ということをもそれほど視野に入れていないようにみえる。

言語情報ということからいえば、電子化されているテキストを使って、さまざまな電子的かつ研究的、分析的なアプローチをすることが推測される。そうであれば、電子的な「検索」を安定的に行なうことができる、という観点も必要になる。

五は、そうすることによって、例えば明治二十年に文字化されたテキストに、いわゆる「変体仮名」がどの程度使われていたか、といった分析ができなくなる。字源になっている漢字を、例えば〈 〉に入れて〈支〉などと表示することも考えられなくはない。しかしこれは、研究論文などでは（便宜的な方法として）認められるであろうが、「現代日本語母語話者がよみやすい」ということから、乖離する。また電子的な検索なども必ずしも簡単ではなくなる。そのように考えたが、この五についても目的によって、別の「翻字」があり得るかもしれない。

六の「々々」などによって文字二字以上に使われる繰り返し符号を代替え表示する方法はあくまでも便宜的な方法であるが、現時点ではいい方法が思い浮かばない。電子的な検索を考えると、「だら々々」よりも「だらだら」と「翻字」しておいた方がよい。しかし、そうすると、そもそも繰り返し符号を使わずに文字化されていた「だらだら」との区別がつかなくなる。そして、繰り返し符号がどう使われていたか、という分析ができなくなる。そうした意味合いからすれば、六は検索を想定した「凡例」ということになる。このあたりは、「翻字」の目的によって、変わってもいいのかもしれない。しかし、今後いろいろなところで、「翻字」が行なわれるであろうことを考えると、早い時期に「標準的翻字」の「凡例」を確定し、それにのっとって「翻字」が展開すれば、無駄はない。

漢字列に振仮名を施すことは電子的に可能ではある。例えば「切<sup>せつ</sup>ない」と表示することはできる。これは「セツナイ」という語を漢字平仮名交じりで文字化し、漢字に振仮名を施したということになるが、「せつない」という文字列で検索をかけた時に、確実にそれが検索できるためには、「切（せつ）ない」とあった方がよいと思われる。これも実際には検索エンジンの検索方法によるが、丸括弧などの符号類を無視するかたちで検索がかけられれば「（せつ）ない」は「せつない」でヒットする。

改行箇所すべてに「／」を入れて、改行位置がわかるようにしておけば、「原態」がどのようなかたちで文字化されているかがわかる。江戸時代以

前のテキストに関しては、そのようにしておく必要がある場合もあろう。

「／」を入れて翻字をし、必要がなければ、「／」を除いたかたちで翻字を提示するということも考え得るが、ここでは八のようにしておく。

九では「ダッシュ・ダーシ」のみについて定めたが、いわゆる「約物」については今回は措く。

十、芥川龍之介の自筆原稿「母」においては、訂正が二次、三次にわたる場合がある。訂正は、まずは原稿用紙に記された文字を何らかのやりかたで抹消し、右側に訂正後の文字が記されている。それをさらに訂正する場合は、やはり何らかのやりかたで抹消し、右側に訂正後の文字が記されている。これを基本的な訂正の順番とみなす。ただし、訂正が左右にある場合もある。右側に訂正を書くと「みなし」ているので、左側にも訂正がある場合は、右が先、左が後、と仮に判断している。原稿用紙に「殊」とある箇所を抹消して、右に「それ」と記し、「それ」を抹消して右に「第一」と記されている場合は、〔〔〔殊〕 それ〕 第一〕というかたちで表示する。

右の「凡例」に基づいて芥川龍之介「母」の自筆原稿の翻字を示す。[一枚目]のかたちで原稿の枚数を示す。

## 二 翻字本文

[一枚目]

母

芥川龍之介

一

部屋の隅に据ゑた姿見には、西洋風に壁を塗つた、しかも日本風の疊がある、——上海〔固〕特有の〔〔部屋〕 二階〕旅館の〔〔内部〕 部屋〕座敷〕二階が、一部分はつきり映つてゐる。まづつきあたりに空色の壁、それから眞新しい何疊かの疊、最後にこちらへ後を

[二枚目]

見せた、西洋髪の方が一人、——それが皆冷かな光の中に、切（せつ）ない程はつきり映つてゐる。女は其處にさつきから、縫物か何かしてゐるらしい。

尤も後〔〔は見せ〕を〕は向いたと云ふ條、地味な〔〔銘仙の〕 女〕銘仙羽織の肩には、崩れかか\*1た前髪の〔〔陰に、〕 □〕はづれに、蒼白い横顔が少し見える。勿論肉の薄〔い〕い耳〔が〕に、ほんのり光〔を〕が透〔かせ〕つたのも見える。やや長めな揉み上げの毛が、かすかに耳の根をぼかしたの見える。

[三枚目]

この姿見のある部屋には、〔隣□〕隣室の赤子の啼き声の外に、何一つ沈黙を破るものはない。未に降り止まない雨の音さへ、此處では一層その沈黙に、单调な気もちを添へるだけである。

「あなた。」

さう云ふ何分かが過ぎ去つた後、女は〔姿見を後にした儘〕仕事を續けながら、突然、しかし覚束なさうに、かう誰かへ声をかけた。

誰か、——〔それは姿見と並んだ窓に、ぼ〕部屋の中には女の外にも、  
丹

#### [四枚目]

前を羽織つた男が一人、ずつと離れた疊の上に、〔新聞を前へ〕英字新聞をひろげた儘、長々と腹這ひになつてゐる。が、その声が聞えないのか、男は手近の灰皿へ、巻煙草の灰を落したぎり、新聞から眼さへ挙げ〔や〕ようとしなない。

「あなた。」

女はもう一度声をかけた。その癖女自身の眼も、ぢつと針の上に止まつてゐる。

「何だい。」

男は〔けげんさうに〕幾分うるささうに、丸々と肥つた、口髭の短い、活動家らしい顔を抬げた。

#### [五枚目]

「この部屋ね、——この部屋は変へちやいけなくつて？」

「部屋を変へる？ だつて此處へは〔昨夜〕やつと昨夜、引つ越して来たばかりぢやないか？」

男〔はげげんさ〕の顔はけげんさうだつた。

「引つ越して来たばかりでも。——前の部屋ならば明いてゐるでせう〔。〕？」

男は彼是二週間ばかり、彼等が窮屈な思ひをして来た、日当りの、悪い三階の部屋が、一瞬間眼の前に見えるやうな気がした。——塗

#### [六枚目]

〔塗〕りの剥げた窓側の〔〔窓〕壁〕壁には、色の変つた疊みの上に、更紗の窓掛けが

垂れ下つてゐる。その窓には何時水をやつたか、花の乏しい天竺葵（ジェラニウム）が、薄い埃をかぶつてゐる。おまけに窓の外を見ると、始終ごみごみした横町に〔は、〕麥藁帽をかぶつた支那の車夫が、所在なさうにうろついてゐる。……

「〔お前はあすこ〕だがお前はあの部屋にゐるの〔が、〕は、嫌だ嫌だ



と云つてゐたぢやないか？」

「ええ。それでも此處へ来て見たら、急に又

[七枚目]

この部屋が嫌になつたんですもの。」

〔「女は針の手をやめると、もの憂さうに顔を擧げて見せた。眉の迫つた、眼の切れ〔□〕の長い、感じの鋭さうな顔だちである。が、眼のまはりの暈を見ても、何か苦勞を〔経て来た〕堪へてゐる事は、多少の想像が出来ないでもない。さう云へば病的な氣がする位、米噛みにも静脈が浮き出してゐる。

〔〔男は曰〕「好いで」

「ね、好いでせう。——いけなくつて？」

[八枚目]

「しかし前の部屋よりは、廣くもあるし居心も好いし、〔——〕不足を云ふ理由はないんだから、——〔□〕それとも何か嫌な事〔でも〕がある〔の〕かい？」

「何つて事はないんです〔れ〕けれど、……」

女は〔仕事に〕ちよいとためらつた〔が〕ものの、そ〔の〕れ以上立ち入つては答へなかつた。が、もう一度念を押すやうに、同じ言葉を繰り返した。

「いけなくつて、どうしても？」

今度は男が新聞の上へ、煙草の煙を吹きかけたぎり、好いとも悪いとも答へなかつた。

[九枚目]

部屋の中は又ひつそりなつた。唯外では〔相〕不相変、休みのない雨の音がしてゐる。

「春雨やか、——」

男は少時たつた後、ごろりと仰向きに寐轉ぶと、独り語のやうにかう云つた。

「蕪湖（ウウフウ）住みをするやうになつたら、発句でも一つ始めるかな。」

女は何とも返事をせずに、縫〔の〕物の手を動かしてゐる。

「蕪湖〔は田舎町に違ひないが、〕もそんなに悪い所ぢやないぜ。〔〔殊に〕それ〕第一社」

[十枚目]

宅は大きいし、庭も相当に廣いしするから、草花なぞ作るには持つて来

いだ。何でも元は陶家花園とか云つてね、——」

男は突然口を噤んだ。何時か森（しん）とした部屋の中には、かすかに人の泣くけはひがしてゐる。

「おい。」

泣き声は急に聞えなくなつた。と思ふとすぐに又、途切れ途切れに續き〔始め〕出した。

「おい。敏子」

[十一枚目]

半ば体を起した男は、疊に片肘靠せた儘、当惑らしい眼つきを見せた。

「お〔い。〕前は己と約束したぢやないか？ もう愚痴はこぼすまい。もう涙は見せない事にしよう。もう、——」

男は〔〔僅に〕ちよいと〕ちよいと 眶（まぶた）を〔抬〕擧げた。

「それとも何か〔□〕あの事以外に、悲しい事でもあるの〔か〕かい？ たとへば〔支〕且本へ歸〔りたい〕りたいとか、支那でも田舎へは行きたくないとか——」

[十二枚目]

「いいえ。——いいえ。そんな事ぢやな〔いわ〕くつてよ。」

敏子は涙を落し落し、意外な程烈しい打消し方をした。

「私はあなたのいらつしやる所なら、何處へでも行く気でゐるんです。ですけれども、——」

敏子は伏眼になつたなり、溢れて来る涙を抑へようとするのか、ぢつと薄い下唇を噛んだ。〔見れば〕見れば蒼白い頬の底にも、目に見えない

[十三枚目]

焰のやうな、切迫した何物かが燃え立つてゐる。震へる肩、濡れた睫毛、——男はそれらを見守りながら、現在の気もちとは没交渉に、一瞬間妻の美しさを感じた。

「ですけれども、——この部屋は嫌なんですもの。」

「だからさ、だからさつきもさう云つたぢやないか？ 何故（なぜ）この部屋がそんなに嫌だか、〔〔さ〕□〕それさへはつきり云つてくれれば、——」

男は此處まで云ひかけると、敏子の眼がち

[十四枚目]

つと彼の顔へ、注がれてゐるのに気が〔□〕ついた。その眼には涙の漂つた底に、殆ど敵意にも紛ひ兼ねない、悲しさうな光が〔漂つて〕閃いてゐる。何故この部屋が嫌になつたか？ ——それは〔男〔の〕の口から出た〕

独り男自身の疑問だつたばかりではない。同時に又〔□〕敏子が無言の内に、男へ突きつけた反〔問〕問である。男は〔思はずためらひ〕敏子と眼を合せながら、二の句を次ぐのに躊躇した。

しかし言葉が途切れたのは、ほんの数秒の間である。男の顔には見る見る内に、了解の

[十五枚目]

色が漲つて来た。

「あれか？」

男は感動を蔽ふやうに、妙に素つ氣のない声を出した。

「あれは已も氣になつてみたんだ。」

敏子は男にかう云はれると、ぼろぼろ膝の上へ涙を落した。

窓の外には何時の間にか、日の暮が雨を〔白〕煙らせてゐる。その雨の音を撥ねのけるやうに、〔隣室では〕空色の壁の向うでは、〔しつきりない〕今も亦赤児が泣き續〔□〕けてゐる。……

[十六枚目]

二

二階の出窓には〔日〕鮮かに、朝日の光が当つてゐる。その向うには三階建の、赤煉瓦にかすかな苔の生へた、逆光線の家が聳えてゐる。薄暗いこちらの廊下〔に立つ〕にゐると、出窓はこの家を背景にした、大きな一枚の画のやうに見える。巖丈（がんじやう）な櫺の窓枠が、丁度額縁を嵌めたやうに見える。その画のまん中には一人（ひとり）の女が、こちらへ横顔を向けながら、毛糸の〔A懸け〕靴足袋を編んでゐる。

女は敏子よりも若いらしい。〔〔派手な銘仙の〕血色の好い頬〕雨に洗は

[十七枚目]

れた朝日の光は、その肉附きの豊かな肩へ、——派手な〔銘〕大島の羽織の肩へ、はつきり大幅に流れてゐる。それがやや仰向〔□〕きになつた、血色の好い頬に反射してゐる。心もち厚い唇の上の、かすかな生ぶ毛にも反射してゐる。

〔今は九〕午前十時と十一時との間、——〔今が〕旅館では今が一日中でも、一番静かな時刻である。〔〔泊り客〕商用で〕商賣に来たのも、〔〔遊覧〕び〕見物に来たのも、  
泊り客は大抵外出して〔□〕しまふ。下宿してゐる勤め人たちも、勿論午までは歸つて来ない。〔〔女〕出窓にはさう云ふ沈〕その跡には

[十八枚目]

唯長い廊下に、時々上草履を響かせる、女中の足音〔□〕だけが残つてゐる。

〔こ〕この時もそれが遠くから、だんだんこちらへ近づい〔たと思ふ〕て来ると、〔女は聞き〕出窓に面した廊下には、四十恰好の女中が一人、紅茶の道具を運びながら、影画のやうに通るかかつた。女中は何とも云はれなかつたら、女のゐる事も気がつかずに、その儘通りすぎてしまつたかも知れない。が、女は女中の姿を見ると、心安〔や〕さうに声をかけた。

[十九枚目]

「お清さん。」

女中はちよいと會釈し〔ながら〕てから、出窓の方へ歩み寄つた。

「まあ、御精が出ますこと。〔坊ち〕――坊ちやんはどうなさいました？」

「うちの若様？ 若様は今御休み中。」

女は縫針を休めた儘、子供のやうに微笑した。

「時にね、お清さん。」

「何でございます？ 眞面目さうに。」

[二十枚目]

女中も出窓の日の光に、前掛だけくつきり照らさせながら、浅黒い眼もとに微笑を見せた。

「御隣の野村さん、――野村さんでせう、あの奥さんは？」

「ええ、野村敏子さん。」

「敏子さん？ ぢや私と同じ名だわね。あの方はもう御立ちにな〔る〕つたの？」

「いいえ。まだ五六日は御滞在でございませう。それから何でも蕪湖（ウフウ）とかへ、――」

[二十一枚目]

「だつて〔〔今朝御隣〕さつき前を〕通つたら、〔お〕御隣にはどなたもいらつしや〔な〕らなかつたわよ。」

「ええ。昨〔夜〕晩（さくばん）〔又（また）〕急（きう）に又、三階へ御部屋が変りましたから、――」

「さう。」

女は何か考へるやうに、〔〔ちよいと〕丸〔々〕丸した〕丸丸した顔を傾けて見せた。

「あの方でせう？ 此處へ御出でになると、〔すぐ〕その日に御子さんをなくなしたのは？」

「ええ。御気の毒でございますわね。すぐに」

[二十二枚目]

病院へも御入れになつたんですけれど。」

「ぢや病院で〔お〕御なくなりなすつたの？ 道理で何にも知らなかつた。」

女は〔水々しい眼の中〕前髪を割つた額に、か〔□〕すかな憂鬱〔〔な色〕の影〕の色を浮べた。が、すぐに又元の通り、快活な微笑を取り戻すと、悪戯さう〔にかう云〕な眼つきになつた。

「もうそれで御用（ごやう）ずみ。〔さつ〕どうかあ〔ち〕ちらへいらしつて下さい。」

「まあ、随分でございますね。」

女中は思はず笑ひ〔ながら〕出した。〔〔わざと〕女のよりかか〕＊

[二十三枚目]

「そんな邪慳な事を仰有ると、薦の家から電話がかかつて来ても、内證で旦那様へ〔と〕取り次ぎますよ。」

「好いわよ。早くいらつしやいつてば。紅茶がさめてしまふぢやないの？」

女中が出窓に〔□〕ゐなくなると、女は又〔編〕編物を取り上げながら、小声に歌をうたひ出した。

午前〔九〕十時と十一時との間、——旅館では今が一日中でも、一番静かな時刻である。部屋毎の花瓶に素枯れた花は、この間に女中が

[二十四枚目]

取り捨ててしまふ。二階三階の眞鍮の手すりも、この間に下男（ボーイ）が磨くらしい。さう云ふ沈黙が擴がつた中には、唯往來のざわめきだけが、硝子戸を開け放した諸方の窓〔〔々〕窓〕から、日の光と一しよにはひつて来る。

その内にふと女の膝から、毛糸の球（たま）が轉げ落ちた。球は〔一つ〕とんと弾むが早いか、〔〔ころころ〕赤い〕一筋の赤を引きずりながら、ころころ廊下へ出〔□〕ようとする、——と思ふと誰か一人、丁度其處へ来かつたのが、静かにそれを〔拾〕拾ひ上げた。

[二十五枚目]

「どうも難有うございました。」

女は籐椅子を離れながら、恥しさうに會釈〔した。〕をした。見れば球を拾つたのは、今し方女中と噂をした、痩せぎすな隣室の夫人である。

「いいえ。」

毛糸の球は細い指から、脂（あぶら）よりも白い括（くく）り指へ移つた。

「此處は暖かでございます〔ます〕ますね。」

敏子はお窓へ歩み出ると、眩しさにやや眼を細めた。

[二十六枚目]

「ええ。かうやつて居りまして、居睡りが出る位でございますわ。」

二人の母は佇んだ儘、幸福さうに微笑し合つた。

「まあ、〔御〕御可愛いたあたですこと。」

敏子の声はさりげなかつた。が、女はその言葉に、思はずそつと眼を〔伏せた。〕外らせた。

「二年ぶりに編針を持つて見ましたの。——あんまり暇なものですから。」

「私なぞはいくら暇でも、怠けてばかり居り」

[二十七枚目]

ますわ。」

女は〔編物〕籐椅子へ編物を〔のせ〕捨てると、仕方がなささうに微笑した。敏子の言葉は無心の内に、もう一度女を打つたのである。

「お宅の坊ちゃん、——坊ちゃんでございましたね？——何時御生まれになりましたの？」

敏子は髪〔を〕へ手をやりながら、ちらりと女の顔を眺めた。昨日は泣き声を聞いてゐ〔□〕るのも、堪へられない気がした隣室の赤〔子〕児、

[二十八枚目]

—それが今では何物よりも、敏子の興味を動かすのである。しかもその興味を満足させれば、反つて〔悲〕苦しみを新たにするの〔は〕も、はつきりわかつてはゐるのである。これは小さな動物が、コブラの前〔に〕では動けないやうに、〔〔苦痛〕悲しみ〕敏子の心〔が〕も何時の間にか、〔悲〕苦しみそのものの催眠作用に捉はれてしまつた結果であらうか？それとも又〔〔創〕傷口を開いてまでも〕悲しみ〕手傷を負つた兵士が、わざわざ傷口を開いてまでも、一時の快を貪るやうに、〔悲〕いやが上にも〔悲〕苦し〔みを求める〕まねばやまない、病的な

[二十九枚目]

心理の一例であらうか？

「この御正月でございました。」

女はかう答へてから、ちよいとためらふ気色を見せた。しかしすぐに眼を挙げると、気の毒さうにつけ加へた。

「御宅では〔飛〕とんだ事でございましたつてねえ。」

敏子は沾（うる）んだ眼の中に、無理な微笑を漂はせた。

「ええ。肺炎になりましたものですから、——ほんたうに夢のやうでございました。」

[三十枚目]

「それも御出で匆匆にねえ。何と申し上げて好いかわかり〔〔ま〕□〕ませんわ。

女の眼には何時の間にか、かすかに涙が光つてゐる。

「私なぞはそんな目にあつたら、まあ、〔ど〕どうするでございませう？」

「一時は随分悲しうございましたけれども、——もうあきらめてしまひましたわ。」

二人の母は佇んだ儘、寂しさうに朝日の光を眺めた。

[三十一枚目]

「こちらは悪い風が流行りますの。」

女は考へ深さうに、途切れてゐた話を續け出した。

「内地はよろしうございますわね。気候も〔此處〕こちら程不順ではなし、——」

「参りたてでよくはわかりませんが、大へん雨の多い所でございますね。」

〔女は〕今年は余計——あら、泣いて〔みるやうで〔女は〕ござ〕居りますわ。」

〔〔女は〕女は〕〔聞き耳〕

[三十二枚目]

女は耳を傾けた儘、別人のやうな微笑を浮べた。

「ちよいと御免下さいまし。」

しかしその言葉が終らない内に、もう其處へはさつきの女中が、ばたばた上草履を鳴らせながら、泣き立てる赤児を抱きそやして来た。赤児を、——美しいメリンスの着物の中に、しかめた顔ばかり〔見える〕出した赤児を、——敏子が内心見まいとしてゐた、丈夫さうに頤の括れた赤児を。

[三十三枚目]

「〔まあ〕私が窓を拭きに参りますとね、すぐにもう眼を御覚ましなすつて。」

「どうも憚り様。」

女は〔〔まだ〕もう〕まだ慣れなさうに、そつと赤児を〔抱き〕胸に取つた。

「まあ、御可愛い。」

敏子は顔を寄せながら、鋭い乳〔臭〕の臭ひを〔嗅いだ〕感じた。

「おお、おお、よく肥つていらつしやる。」

〔〔女は〕殆〕やや上気した女の顔には、絶え〔ず〕間ない微笑が

[三十四枚目]

満ち渡つた。女は敏子の心もちに、同情が出来ない訣ではない。しかし、——しかし〔こ〕その乳房の下から、——張り切つた母の乳房の下から、〔湧き上つて来〕汪然と湧いて来る得意の情は、どうする事も出来なかつたのである。

三

窓掛けを絞つた二階の窓は、庭木の梢と向ひ合つてゐる。ぼんやり固まつた緑の中に、節高（ふしだか）な枝がさし曲つた、槐（えんじゅ）の梢と向ひ合つてゐる。敏子は〔その窓〕其處に〔〔よりかかり〕肘をかけ〕佇みながら、も

[三十五枚目]

う暮色が動き出した、木の多い庭を眺めてゐる。その仄かな襟足が、後れ毛も戦がせない所を見ると、何時の間にか微風は吹きやんだらしい。が、その中形の湯帷子の肩が、かすかな、——殆有無さへ疑はしい程、かすかな薔薇色に煙つてゐるのは、どう云ふ外光の加減であらうか？

庭木の梢を隔てた空には、支那では洗濯をする時に使ふ、砧のやうな棒の音が、寂しい訝（こだま）を〔〔起し〕響かせて〕ゐる。その音の起る所〔に〕へ行けば、きつ

[三十六枚目]

と水際の芦の中に、耳環を下げた女が一人、蹲つてゐるのに相違ない。

「おい、〔お〕御前にも手紙が来てゐるぜ。」

敏子は静かに振り返つた。

〔男は〕男は紅木（ホンムウ）の机の前に、樂々とあぐらをかいだ儘、〔〔何〕手紙や〕長さうな手紙を抜いてゐる。その後（うしろ）の白壁には、表装もしない石刷の聯が、無造作に鋌で貼りつけてある。

「さう。——〔何處にあつて〕これ？」

敏子は机の側にゐると、〔何本かの〕其處にあつた手紙を取

[三十七枚目]

り上げて見た。手紙は水色の封筒の上に、〔器用な〕拙（つた）ないペンの字〔が〕を走〔つ〕らせてゐる。

「誰だい、平尾敏子と云ふのは？」

〔男はかう云ふ間でも、やはり手紙を読み續けてゐる。〕男は手紙を讀み續けながら、どうしても好いやうな尋ね方をした。



「御〔奥の〕隣りの奥さん。あの上海の宿屋〔〔の〕にみ〕にみた、——」  
何分か沈黙が過ぎ去った後、敏子は手紙を擴げたなり、〔突然男に〕  
妙に震へてゐる声をかけた。  
「あなた。」

[三十八枚目]

「え？」

〔男は手紙を巻き返してゐる。〕

「あの方の赤ちやんもなくなつたん〔で〕ですつて。」〔？ あんなに  
丈夫さうな赤ちやんも、——〕

男は〔驚いた顔を擧げた。〕手紙を巻き返しながら、〔驚いたらしい〕  
前よりも目に焼けた顔を向けた。

「なくなつた？ 何で？」

「風邪ですつて。あ〔□〕んなに丈夫さうな赤ちやんでも。」

敏子は〔蒼白い顔〕憂鬱な眼をした儘、ちつと手紙に見入つてゐる。

「始は寐冷え位の事と思ひ居り候——で」

[三十九枚目]

すつて。」

「そりや気の毒だな。」

男はちよいと頭を振ると、机の上の罐の中から、巻煙草へ一本火をつけた。

「病院へ入れ候時は、もはや手遅れと相〔成〕成り、——ね、好く似て  
ゐるでせう？ 注射を致すやら、解毒吸入を致すやら、いろいろ手を盡し  
候へども、——」

敏子は熱心に讀み續けた。

「手を盡し候へども、——それから何と讀」

[四十枚目]

むのかしら？ 泣き声だわ。泣き声も次第に細るばかり、その夜の十一時  
五分ほど前には遂に息を引き〔と〕取り〔候。〕、——」

敏子は〔ほつと〕かすかな〔息をついた。〕身震ひをした。

「息を引き取り候。〔私の〕その時の私の悲しさ、重重御察し下され度、  
——さぞねえ。」

男は何とも口を入れずに、壁に貼つた聯を眺めてゐる。蒼茫海水溶江  
水、羅列他山助我山。——さう云ふ大字の並んだ側には、板橋鄭Bと云ふ落〔疑〕  
款がある。

[四十一枚目]

「それにつけても、何時ぞや御許様に御眼にかかりし事なぞ思ひ出され、あの頃は御許様にもさぞかし、——ああ、いや、いや。」

敏子は手紙を投げ捨てると、神経的に濃い眉をひそめた。

「ほんたうに世の中はいやになつてしまふ。」

「いやになつたつても仕方がない。どうせ生者必滅なんだ。」

男は煙を〔吐〕吐き出しながら、寧ろ冷かにかう云つた。

[四十二枚目]

〔云つた。〕

「それでも〔余り〕あんまりひどすぎるわ。赤ん坊に罪でもありはしましいし。」

敏子は力が抜けたやうに、畳へ片手ついたなり、其處に落ちてゐる手紙の上へ、もう一度暗い眼を落した。と思ふとその眼から、突然涙が〔頬〕膝へ垂れた。

男はちらりと敏子を見た。が、それには何とも云はずに、やはり煙草を吹かしてゐる。

「あなた。」

[四十三枚目]

又何分かの沈黙の後、かう云ふ声が聞えた時に〔は〕も、敏子は〔頬杖をついた男に、〕まだ拗ねたやうに、〔泣き濡れ〕蒼ざめた横顔をそむけながら、〔悲しさうに〕空間の何處を眺めてゐた。

「何だい？」

「私は、——私は悪〔い〕いんでせうか？」〔〔御隣り〕平〕平尾さんの赤ちやんのなくなつたのが、——」

男は火のついた煙草の先から、女の横顔へ眼を移した。

「なくなつたのが嬉しいんです。」

[四十四枚目]

敏子〔は〕の声には今までにない、荒々しい力がこもつてゐる。

「御気の毒だと思ふ〔の〕んですけれども、——それでも私は嬉しいんです。嬉しくつては悪いんでせうか？ あなた。悪いんでせう〔〔□〕か、〕か？〕か、私は？」

男は煙草を啣へた儘、もう一度何とも〔考〕答へなかつた。何か人力〔〔に〕の〕に及ばない物〔〔と、〕に、〕が、〔黙〕厳然と前へでも塞がつたやうに。

庭木の梢が暮れか〔た〕かつた空には、砧に〔よく〕紛ひ

[四十五枚目]

〔似た〕さうな棒の音が、寂しい砦を〔□〕響かせてゐる。その音の起る所へ行けば、きつと水際の芦の中に、耳環を下げた女が一人、〔〔□〕夫の〕今でも〕夫の服か子供の服〔を〕の洗濯をしてゐるのに相違ない、  
.....

### 三、翻字に基づく考察など

本稿は「電子化を視野に入れた翻字」をテーマとしているので、自筆原稿と「初出」「初版」との対照はすべて今後の課題としたい。ここでは右の翻字を補うものとして、おもに文字化にかかわることがらのみを摘記しておく。

[三枚目]の三行目に記された「音」は「六十一十日」にちかい書き方がなされている。これは、佐藤栄作「草の字体へ」（早稲田大学『アクセント史資料研究会論集』（□）所収）において、「音」が「六+百」「七+百」と分解的に説明されることがかつてあったことについてふれ、「楷書（真）につながる行書タイプといえるものが「六百」、草書タイプが「七百」。（略）草の字体としては「音」は／七の字+下に+百の字／（略して、一七+百／、以下も同様に略することあり）として問題ないと考える」と述べていることと呼応している。つまり龍之介は「楷書（真）につながる行書タイプ」の「音」を書いていることになる。

四行目の「気」は「メ」の部分が「ノ」と書かれているようにみえる。これは[五枚目]十行目の「気がした」の「気」、[七枚目]七行目の「病的な気がする」の「気」もも同様。[十二枚目]六行目も同様。[十三枚目]三行目・[十四枚目]一行目・[十五枚目]三行目・五行目も同様。[十八枚目]七行目・[二十一枚目]十行目の「御気の毒」の「気」も同様。[二十七枚目]十行目「気がした」の「気」も同様。[二十九枚目]三行目、四行目の「気」も同様。[三十一枚目]四行目「気候」の「気」も同様。[三十三枚目]十行目の「上気」の「気」も同様。[三十九枚目]二行目の「気の毒」の「気」も同様。つまり龍之介はこの原稿においては、すべての「気」を「气+ノ」の形で書いている。「气」は「きがまえ」の部首に置かれる字であり、そうであれば、「気」を／気がまえ+メ／と認識し、そのバリエーションとして／気がまえ+ノ／があり得たか。

[五枚目]の四行目の「来た」は「来」字で翻字しているが、原稿用紙に記されている字は「木」に短い横棒二本が加わったような形をしている。このような場合、龍之介は「来」を書くつもりであったか、「來」を書くつもりであったか、あるいはその他の形を書くつもりであったか、ということが書かれた形からは判断できない。そういうことも当然あると考えておく必要がある。[十七枚目]八行目の一回目の「来た」ははっきりと「来」が書かれている。ただし二回目の「来た」ははっきりとしていない。十行目「来ない」の「来」は「木」に短い横棒二本が加わったような形をしている。[二十四枚目]三行目「往來」の「來」ははっきりとこの形であることがわかる。[三十四枚目]二行目、五行目もはっきりと「來」。龍之介が「来」をどのような形と認識していたかは現時点では不分明としかいいようがないが、実現形としては「來」「来」及び「木+短い横棒二本」という三つの形があったことがわかる。

[六枚目]には「疊み」とあって「み」が送り仮名として添えられている。

[七枚目]六行目の「多少」の「多」の上の「夕」は「ヨ」のような形で書かれている。[三十一枚目]の「多い所」の「多」も同様。[三十五枚目]一行目「木の多い」の「多」も同様。

[八枚目]六行目の「答へなかつた」の「答」は草冠の字が書かれている。[二十九枚目]三行目の「答へてから」の「答」も同様。

[九枚目]一行目の「相不変」から「不相変」の修正は赤字でなされている。

[十一枚目]八行目の「たとへば〔支〕日本へ歸〔りた~~い~~〕りたいとか、支那でも田舎へは行きたくないとか——」の箇所、澤西祐典（二〇一五）は「たとへば〔友〕日本へ歸〔りた~~い~~〕りいとか、支那でも田舎へは行きたくないとか——」と翻字している。原稿では「歸りたい」と書いた「りた~~い~~」を抹消して、右に「りた」と書き、その下の桁に「い」と書いているので、「帰〔りた~~い~~〕りい」はまず誤りであろう。「たとへば」に続く抹消を「友」とみなしているが、「たとへば支那（へ歸りたいとか、支那でも田舎へは行きたくないとか）」というような文を書こうとしていったん「支」と書き、それを「日本」に修正したとみるのが自然ではないだろうか。なぜ「友」と書いたかは説明しにくい。

[十二枚目]八行目「溢れて来る」の「溢」の旁りは「益」の形にちかい。

[十五枚目]五行目の「已も」は「オレモ」を文字化したものと思われる。そうであれば、「己も」が正則であるが、龍之介は明らかに「已も」と書いている。ただし[十一枚目]三行目では「己」を書いている。九行目「撥」の旁りは「発」。この形は電子的に表示しにくい。

[十六枚目]「A」は「涎」のさんずいが「口」になった字。

[十七枚目]ではいったん「遊覧」と書き、「覧」を抹消して「び」に修正して、「遊覧」から「遊び」に変えた後にさらに「見物」に修正したと思われる。龍之介の脳裏では「遊覧」「遊び」「見物」が連合関係を成していることがわかる。

[二十枚目]一行目「前掛」の「前」は草書、「掛」は楷書にちかく書かれている。「前」のようにひろい意味合いで「よく書く」と思われる漢字は草書化しやすいか。[二十二枚目]四行目「前髪」の「前」も草書で書かれている。[二十八枚目]五行目「コブラの前」の「前」も同様。

[二十二枚目]末尾の＊から[二十三枚目]冒頭は不連続。

[二十三枚目]六行目を「女中が出窓に〔□〕ゐなくなると」と翻字した。「ゐ」の前に書かれた文字はデジタル画像では不分明。澤西祐典（二〇一五）は「い」と判読している。

[二十五枚目]六行目「細い指から、脂よりも白い括り指へ」の「指」「脂」「指」の旁りの上部はいずれも「ヒ」ではなく「上」と書かれている。

[三十五枚目]「その音の起る所に」と書いてから、「に」を抹消して「へ行け」と書いている。格助詞を「ニ」から「へ」に変えた例として注目したい。

[四十枚目]一行目「次第」の「第」は草書。「B」は「變」の「のぶん」を「火」に変えた字。Cはいったん「疑」らしき字を書きそれを「欸」（「疑」の旁りが「欠」になった字）に訂正している。この「欸」は『康熙字典』が「款」の「俗字」として載せている字にあたる。処理としては〔〕に「疑」を入れ、訂正後を「欸」とするやりかたと、「欸」字が電子的に安定していないことを考え併せて、訂正後を「款」とするやりかたとが考え得る。

[四十一枚目]八行目「必滅」の「滅」はにすい。

## おわりに

本稿は「凡例」の二に記したように「できるかぎり安定した電子的な情報交換ができる」ということを原則とした「翻字」の一つのモデルとなることを目的としている。今後、さまざまなテキストを素材として同様の試みを重ねていくことによって、「標準的翻字」を模索していきたいが、「原態のできるかぎりの保存」と「安定した電子的な情報交換ができる」ということが二つの軸となる。両者は相反する点があるので、「ほどのよい妥協点」を探る必要があり、そうした「妥協点」に至るまでにはある程度の試行錯誤も必要になろう。

有光隆司・小林幸夫・林廣親・松村友視『木下杢太郎『食後の唄』注釈・作品論』（二〇二〇年、笠間書院）は「凡例」1において『食後の唄』本文は、原本のレイアウト・字体をできるかぎり再現することを旨とした。ただし、それが不可能な「X（面）」・「Y（岸）」・「Z（茶）」などの文字が多数あり、その場合は、それに近い現行の活字で印字した」と述べている。X・Y・Zには電子的にも簡単には表示できない字が印刷されているので、今それは省いた。また「あとがき」には「異体字の処理については凡例を御覧いただきたいが、完全とはいかなくても原典の再現性では今後これ以上のテキストは出現しないだろうと著者一同自負している」（七八一頁）と述べられている。

「異体字の処理」という表現、「原典の再現性」という表現が使われている。「凡例」においては、「字体」という表現が使われており、「あとがき」では「異体字」という表現が使われている。そして「異体字」は定義されていない。

木下杢太郎『食後の唄』は大正八年十二月十日に活字印刷されて出版されている。奥付に印刷者として高木西三の名前があげられている。したがって、高木西三を代表者とする印刷所によって、おもにその印刷所に備えられていた活字によって印刷され、出版されたとみるのがもっとも自然であろう。活字であれば、デザインされたものとみるのが自然で、「原典の再現性」はもっとも具体的には、ある活字セットを使って印刷された『食後の唄』という一つのテキストの印刷面を再現するということになる。

例えば北原白秋の『食後の唄』の「序」に「また倏ちに顔を赤める」（「倏

は『康熙字典』が「俗倏字」として掲げている字で、『大漢和辞典』が七六三という番号を与えている字) という行りがある。『大漢和辞典』は『康熙字典』同様「倏」を「倏」の俗字とみなしている。「倏」は〈犬の疾走するさま〉をあらわしており、右は「たちまちに」を文字化したものと思われる。「再現」ということを「目で見えているように」ととらえれば、「倏」と印刷されているのだから「倏」というかたちで「再現」するということになる。これはこれで筋が通っているといえよう。

『木下杢太郎『食後の唄』注釈・作品論』は「序」の二行目「黒鍔廣帽子」をこのように「再現」している。しかし『食後の唄』の「帽」の旁りは「冫+二十目」の形をしている。この字はなにゆえか「再現」されていない。この「冫+二十目」の形の「帽」については、拙書『文献から読み解く日本語の歴史[鳥瞰虫瞰]』(二〇〇五年、笠間書院)の一八四頁において述べた。日本語学において論じられていることが、文学研究において等閑視されることは案外とある、というのが稿者の「実感」である。

文化庁文化部国語課編『明朝体活字字形一覧(上)——一八二〇年～一九四六年』(一九九九年)によれば、先の「倏・倏」に関しては、いずれの字も備わっていない活字セットは別として、両者が揃っている活字セットが多いが、その一方で、築地三号や宝文四号のように上字(犬)がなく、下字(火)のみが備わっている活字セットもたしかにある。そもそも美華書院、美華書館の活字セットに上字(犬)がない。そのことからすれば、『食後の唄』はそのような、下字(火)のみが備わっている活字セットによって印刷された可能性がたかく、それを推測させるという意味合いにおいて「再現」には意義があるとみることはできる。ただしそれは一般的には上字(犬)がひろく使われていたが、たまたまその字が備わっていない活字セットによって印刷されたという個別的なことがらを「再現」したに過ぎないとみることにもできる。下字(火)が少なくとも中国において俗字とみなされたことがあること、日本の活字においても上字(犬)がひろく使われているであろうことからすれば、下字(火)を「再現」せず上字(犬)で「翻字」するということは十分に考えられることと思う。

「目で見えているように再現する」という「方針」はわかりやすい一方で、右でふれた「冫+二十目」の「帽」が「再現」されていないように、

「見ている人」によって恣意的になる可能性がひくくない。やはり、「電子的な情報交換を安定して行なう」ことを視野に入れ、当該漢字がどのように使われてきたかを吟味した上で、一つ一つの漢字の処理をすることが迂遠なようで、結局は安定した「翻字」につながるのではないだろうか。

註1 「昭和期よりも前」と限定したのは、昭和期、平成期に文字化されたテキストは、現在との「隔たり」が少ないとごく常識的に判断したため、それ以上積極的な意味合いではない。

註2 「テキスト」は「何らかの言語情報を文字化したもの」と定義しておく。したがって、木簡のようなものもテキストであるし、児童が書いた作文もテキストということになる。以下鉤括弧は附さずにテキストと表示する。「翻字」はおもに現在使われている文字を使って文字化することと定義しておく。〈字を翻す〉ということであるので、現在とは異なる文字体系によって文字化されたテキストがまずあって、それをおもに現在つかわれている文字体系によって文字化することになる。

註3 （当該論文が何をどう明らかにしようとしているかということによるが）少なくとも、画像に依拠した分析、考察だから研究論文としての資格がないというような極端な判断はされにくくはなっているのではないか。その一方で、（稿者が実際に経験したことであるが）稿者が自身の所持している英和辞書について、分析した論文を投稿した際に、国立国会図書館が画像として公開しているテキストは、稿者の所持している英和辞書と、版が異なるので、どこがどう違うかを述べるように査読意見が附されるといったこともある。そこでは、公開されている画像側に「基準」があるように思われる。